

# 誰にだって何かができる

## AMDAを支える人たち

### What's The AMDA

医師、看護婦、サラリーマン、主婦、OL、学生、定年退職者など、立場を越え、国籍を越えて彼らを引きつけたのは「人道」という共通の価値観。彼らの国際貢献への情熱を、AMDAを通して垣間見た。

私は学生時代、アジア医学生生会に2度参加し、仲間たちと夢を抱きました。その夢とは、アジア医学生連絡協議会の活動を通して友情の絆を育んでいくことでした。ですから私たちが医師となって医療活動を始めた時、自然な形でAMDAが生まれたわけでした。そして医師間の絆が強まると、次の夢、より良い将来のためのより良い医療の開発に向けて力を注ぐようになったのです。何年間もの実践経験により、AMDAは「国際協力」について多くのことを学んできました。まず第一に、人工的に敷かれた国境を越えて、救援を必要としている様々な地域に目を向ける必要があること。第二に彼らの健康を守るだけでなく、彼らを取りまく環境、衛生の安全確保をしなければならぬこと。第三にこれらのことは、医師だけでなく本部や現地で働くスタッフ、コーディネーター、ボランティアの方々の自発的

### お互いがパートナーであること これこそが真の意味の国際協力だ



フランシスコ・P・フロレス

フィリピン人医師、32歳。フィリピン大学医学部およびハーバート大学大学院卒業。現在東京大学医学部大学院博士課程在学中。「緊急救援と開発のための国際ネットワーク」「アジア太平洋緊急救援機構」などのプロジェクトに関わる。

な協力がなければ成り立たないこと。私は自分の持てる知識、技術をAMDAで分かち合い、国際協力という共通の夢を効果的、かつ効率的に達成することに責任を感じています。これまで様々なグループや専門家が、異なる方向、時には相反する方向で国際協力を行なってきました。しかしながら私の考える国際協力とは、援助物資の配分を決め振り分けることにあるのではなく、お互いを助け合うという意味の「相互扶助」であると思っています。現在この精神は国連や多くのNGOで認識されてきていますが、残念なことにその多くは、援助する側と受ける側が実際にパートナーであるということまで認識できていません。私はこれからもAMDAのスタッフとともに真の意味の「国際協力」「相互扶助」に向かって、有意義な人道的救援活動の一端を担えるよう、力を尽くしたいと思っています。

### NGO職員…、 こんなおもしろい仕事はほかにない！

AMDA本部事務局

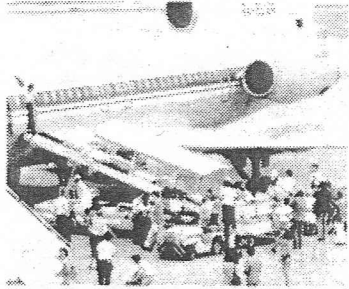
NGOという言葉も知らなかった3年前。当時知り合ったイギリス人女性からエチオピアで教育援助をしているという話を聞きました。見せてもらった写真には、決して足りていない子供たちの状況の中で勉強をしている子供たちの姿が写っていました。私の驚きは、こういった政府でも国連でもない個人が自然に援助活動をしているということでした。彼女と出会う、私も国際協力をしたと思うようになりました。しかしそれはあまりにも漠然としていて、岡山にAMDAがなかったら、きっとその気持ちを抱えたままほかの仕事に就いていたでしょう。もうすぐAMDAに就職して3年になります。最初はずべてが未知なる仕事で、「ジブチ」とか「難民」とか、日常会話では耳慣れない言葉が飛び交っている状況に、胸を挿らせていました。2年日に入った頃に、やっと仕事の要領もわかってきたとい

感じます。現在AMDAは海外12カ国14プロジェクトで約50人のスタッフが働いています（95年11月現在）。そしてすべての連絡は、ここ岡山の本部に入ります。安全とはいえない現場で活躍しているAMDAスタッフ、そして緊急医療救援活動を行う時、私はプロ意識を持ってこの仕事ができるようになったと感じます。ルワンダからウガンダへ陸路で国境を越えた時、入国管理事務所の前長い行列に並んでいたら、ルワンダ人の男性に「君のパスポートは素敵だ。うらやましい」と言われました。その人のパスポートは紙切れのようだったけれど、その国には私の持っていない素敵なものがかくさんありました。遮るものない青い空の下、私はAMDAの活動を通してたくさん、素敵なものに「出会えたよ」という感じがします。そしてそれが、今私が誇りを持って仕事ができる理由だと思っています。



片山新子

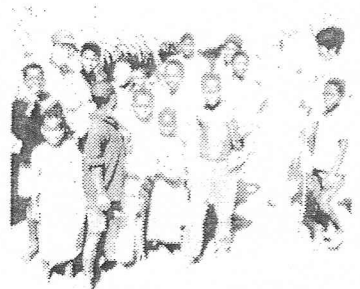
倉敷市児島在住の26歳。3年前にAMDAに就職し、現在AMDA本部事務局国際事業部・海外救援プロジェクト担当。ルワンダ難民・アンゴラ帰還難民救援医療プロジェクト、カンボジア病院支援、その他災害の緊急救援プロジェクトに携わってきた。



▲サハリン大震災の救援のため、医師や物資を乗せて飛び立とうとするチャーター機。岡山空港にて



▲阪神大震災で負傷した人を治療するAMDA医師



▲モザンビーク帰還避難民の村で子供たちと

# 地方都市・岡山にも 国際貢献のできる素晴らしい場がある

AMDA本部財務局データ係

2年あまり前に退職しましたが、それでも何とか生活できる日本は、本当に恵まれた国だと思っていました。そして地球上の恵まれない人のために何かしたいと考えていた時、パネル展でAMDAの活動を知り、参加することになったのです。現在週3日出勤し、経理の集計と会員や寄付して下さった方々の管理をしています。自分の経験と知識がわずかでも役立っていることに意義を感じます。

阪神大震災の時、初期の段階でボランティアの受付をしたのですが、交通費自己負担、宿泊は寝袋で、という条件にも関わらず参加希望者が多く、施設の関係上お断りするのに苦労するほどでした（電話で失礼があったと思いますが、お許し下さい）。あの時は、日本にも素晴らしい一面があるのだとしみじみ感じました。21世紀の最大の問題は、人口問題、エネルギー問題とそれに伴う環境問

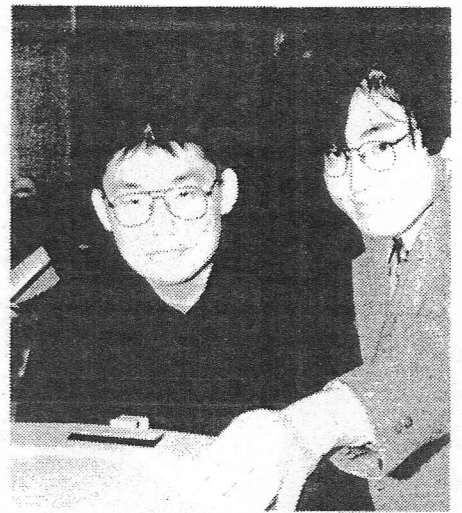
題です。経済力のある日本は先進国の責任として、長期の視野に立った施策を一層推進すべきではないでしょうか。また、AMDAに限って言えば、これは医療援助を中心に活動するNGOです。国際医療協力では直接の医療業務とともに相手国の医療水準を上げることが大切で、これには長期にわたる地道な努力が必要です。AMDAの活動はかなりの部分を寄付金に頼っていますので、これから私は財政基盤を強化して、活動を継続していくことに寄与したいと思っています。

AMDAでは素晴らしい人々に出会える喜びがあります。事務局で働いている人たちに對してもそうですが、現地で劣悪な条件のなか黙々と活動している人、寄付金を送って下さる方々に、日々感激せずにはいられません。また、地方都市である岡山にもこのように国際貢献の場があるということに大変感謝しています。

## 土野和男



倉敷市新田在住の60歳。退職後、自分の経験を活かしてAMDAに参加。週3日の勤務のなかで、経理の集計と会員や寄付金者の管理の仕事をしている。したがって、AMDAのプロジェクトすべてに関わっていることになる。



## 中野知治・坂本秀登

2人共に岡山大学医学部在籍中の24歳(中野)と23歳(坂本)。岡山市在住。中野が阪神大震災・サハリン大震災緊急救援プロジェクトに関わったあと、坂本と一緒にAMDAのインターネット化に尽力。ニューメディア委員会委員長中野(右)、同副委員長坂本(左)。

## 得意なコンピュータを生かして 学生の僕らにできたこと

ニューメディア委員会

僕たちがAMDAに参加したきっかけは、阪神大震災でした。震災の翌々日、AMDAが阪神大震災の医療救援活動を知り、医学生として、また関西出身者として、自分ができることがあるのなら手伝いたいという気持ちから参加させていただいたのです。

僕たちは、国際貢献やボランティアとは自分に負担にならない範囲で自分の好きなことをやるということではないかと思っています。僕たちの場合はたまたまコンピュータが好きで、学生であるためまとまった時間が取れたので、これが参加の足掛かりになりました。そして充実した活動の中で、様々なことを学んできました。AMDAにいる人はみんな、やっつけて楽しい何かを発見して、活き活きと活動されています。

僕たちは阪神大震災やサハリン大震災などのプロジェクトに関わりながら、日本中の同年代の仲間たちと

語らい、様々な医師の特徴ある診察を目の当たりにさせていただき、今後の自分の進路決定に多大な影響を受けました。震災後はAMDAのコンピュータのインターネット化に携わってきました。最初僕たちがインターネット化の話の提案した頃は、AMDAでも「インターネットって何？」という方がほとんどでした。そういった状況のなかでAMDAの方々と話し合い、業者の方と何度も折衝し、また大学の何人もの親友の尽力を得て、曲がりなりにもインターネットで情報発信をすることができるようになりました。このプロジェクトで得た友情と知識は、何物にも代え難い宝となっています。僕たちにとってAMDAは、日頃のうつつぶを晴らす場であり、好きなコンピュータを他人に役立つために使うキャンパスのような場であり、また人生の様々な指針を探る宝庫のような場所でもあるのです。

## What's The AMDA



▲岡山空港内の格納庫へ救援物資を運び入れる市民ボランティア



▲モザンビーク帰還避難民のキャンプで、子供を診察する医師



中塚総一郎

高槻市児島で鉄工所を営む中塚総一郎は、岡山県航空協会の常務理事を務めている。43歳。インドネシア共和国スマトラ島南部大地震被災民救援医療プロジェクト、阪神大震災緊急救援プロジェクト、サハリン大地震救援医療プロジェクトに関わる。

岡山県航空協会では、航空機の様々な利用方法について考え、提案してきました。旅行のための乗物としての利用はすでに一般化していますが、それ以外の使い方は、まだ十分には認知されていないように思います。特に小型機やヘリコプターは、特殊なものとか考えられていないようです。ところがこのような小型機は、大勢の人こそ運ばませんが時間節約には大変役に立ち、救急活動にはもってこいの乗物なのです。小型機をどんどん導入して、事故や水難などの救急活動に利用して欲しい。そんな思いで我々が開催した「フォーラム-救急救難時の航空機利用」にAMDAの参加を得たことから、岡山県航空協会とAMDAの交流は始まりました。我々はAMDAとともに、どのような方法で救援機を飛ばすことができるのかを研究し、準備を進めることにしました。当然、海外への派遣を想定した検討でした。

が、そこに発生したのが阪神大震災だったので。我々は全力を上げて航空会社などの調整に当たり、地震翌日の18日と19日に、岡山空港から大阪・八尾空港経由神戸（ヘリポート）までの葉の空輸を行ないました。その後のサハリン大震災では、出入国の様々な障害を越えてチャーターした大型機で、直接要員8名、物資10トンを送ることができました。いずれの震災にも即時に対応できたことは、それなりの想定と準備が功を奏したと考えています。

あつてはならないことだけれども起こるこのような事態に、海外への緊急救援を行なう場合には、国際貢献として大上段に構えるのではなく、お互い様だからお手伝いしましょうという相互扶助の気持ちを示すことが大切でしょう。困った時の助け合い、日本の村の良さ習慣、その機会を与えてくれるのが、AMDAの活動なのだと思えます。

## 小型機、ヘリコプターを一刻を争う緊急救援活動に活用する

岡山県航空協会

## AMDAでは広く会員を募集しています。

AMDAは「すぐれた医療でよりよい未来を世界に…」をモットーに、難民キャンプや被災地でも救援医療活動を展開しています。現在16カ国に支部を持ち、会員数は日本約700名、海外約200名。最近では通常のプロジェクトに加え、チェチェン、阪神大震災、サハリン大震災、メキシコ大震災、インドネシア大震災の救急救援活動にも取り組みました。あなたもぜひ、AMDAにご参加、ご協力下さい。

緊急時はもちろん、AMDAにおける各種実務作業に携わる「AMDAを支えるボランティア」を募集しています。内容は、翻訳、事務補助、ワープロ入力、パソコン通信、出版・編集・デザイン、企画など、定期、不定期で参加できる方。  
問合せ=AMDA本部/担当:田代 ☎086・284・7730 FAX 086・284・8959

アジア・環太平洋諸国など国外における緊急救援活動を目的とした「アジア・太平洋緊急救援ネットワーク（APRO）」の事前登録要員を、会員の中から募集しています。  
問合せ=AMDA本部/担当:田代  
☎086・284・7730 FAX 086・284・8959

国内における大災害時により迅速、かつ組織的な緊急救援活動を目指した「AMDA72時間ネットワーク」の事前登録要員を、会員の中から募集しています。  
問合せ=AMDA東京オフィス/担当:六本  
☎03・3440・9073 FAX 03・3609・7331

### 会員年会費

■医師・医療会員/1万5000円  
■一般会員/7500円

■学生会員/5000円  
■法人会員/3万円

■賛助会員/2000円（個人に限る）

\*入会の月より、AMDAの活動を取りまとめた月刊会員報「国際医療協力」をお送りいたします。賛助会員については「AMDAゲイジスト」をお送りいたします。